

# 生徒と世界を“つなぐ”英語教育 Fluency第一主義での挑戦

— 京都産業大学附属中学校での実践より

英語でコミュニケーションをとる力を伸ばすには、Accuracy（正確さ）より Fluency（流暢さ）を第一にすべきだ。その信念に基づいた英語教育を実践し、結果を出している京都産業大学附属中学校の事例を紹介する。

## コミュニケーション力を つけるための授業を模索

全員で英語の歌を歌った後、ペアで1分間、英語での会話。その後班に分かれ、交代で英語による発表。聞く側は発表者の話に興味を傾け、良かったところや改善点を伝える。

これは、京都産業大学附属中学校のある日の英語授業の光景。英語科の湯谷賢男先生が実践する「Fluency First」の英語教育の典型例である。

「従来の英語教育は、語学的 Accuracy（正確さ）が絶対的評価の基準であり、中高の教育現場でもそれを基にデザインされた授業が主流でした。その部分を掘り下げるあまり、意思伝達の言語としての Fluency（流暢さ）を主眼とした授業が展開



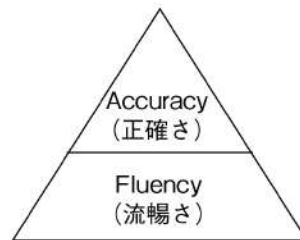
京都産業大学附属  
中学校教諭  
湯谷賢男先生

されず、その結果、一方通行の講義型授業ばかりとなり、コミュニケーションツールとしての英語の技能のな面が伸びなかったのです」

湯谷先生はそう主張する。「学校で勉強した英語では実生活で使えない」その思いは教師になってからも募るばかり。コミュニケーション力をつけるためにふさわしい授業とは何かを常に模索していた。その中で湯谷先生自身、英語の本的多読をはじめ、大量のインプットをし、知っている単語を駆使してとにかくアウトプットしてみようという実践を通して、Fluencyこそが重視されるべきだという結論に至った。

そこで授業でも多読によるインプットを取り入れ Fluency First を基本方針とした。

「Accuracy は、正しいか誤りか、〇か×かの評価だけです。が、Fluency を評価軸にする意味を伝えられれば基本的に×にはなりません。「多少まちがっていてもいいから、どんどん使えよ」というメッセージが



Fluency first の概念。Fluency を土台としてその上に Accuracy を積み上げることでバランスよく英語力が伸びる。

伝わると、生徒たちはどんどんチャレンジするようになります。洋書を授業中にひたすら読む多読による大量のインプット、そして教室という場だからこそできる、生徒と生徒が覚えた単語を使ってコミュニケーションをとるアウトプットを学びの中心に据えています。文法などの Accuracy は生徒の理解度に応じて段階的に指導していきます。Fluency を土台に Accuracy を積み指導のほうに、技能的な英語力向上に効果が見られます」

（湯谷先生）



Fluency first で3年間支援した生徒の自由英作文。総語数800語を超える例も。

30分で500語程度のまとまった英文を書くようになった。双方向の学びを重視

こうした授業のやり方に対しては、周囲から批判的な目で見られることもあった。「そのやり方で受験に必要な読み書きの力はあるのか」といった声が教員や保護者から上がるばかりか、生徒から「講義の回数が少なすぎて大丈夫なんですか」という不安の声も聞かれた。

しかし、実践を通じて着実に4技能（読む・書く・聞く・話す）の力を身につけ、中学2年で複数の生徒が英検2級に合格者などの成果を示すことで、周囲からも理解を得られる

【問い合わせ先】

（株）学研プラス 英語教育事業室 / 西日本文芸営業室 03(6431)1573 global-english@gakken.co.jp

ようになった。

コミュニケーション能力の育成や主体的な学習態度の養成を考えたときに、重要視されるのが「双方向の学び」だという。教員と生徒、あるいは生徒同士がお互いにコミュニケーションする機会を増やすため、ペアワークやグループワークを積極的に取り入れている。

湯谷先生は、週6コマの授業のうち、1回を授業内多読（絵本を中心として洋書を自由に読む活動）、1回を Fluency First

でのアウトプット活動（スピーキング・ライティング）をメインとした時間に、1回をオンラインを含む英会話にあて、残り3回をリーディングレッスンや文法解説をする時間としている。

その中で、Fluency First の実践のひとつとして導入しているのがオンライン英会話だ。ネイティブ教員による授業はあるものの、1対多なので、生徒が会話をする機会は限られる。そこで、外国人と1対1で対峙し、会話をする機会として中2生と中3生で年間10回のカリキュラ

ムを導入している。

「オンライン英会話は、英語力の力試しになり、Fluency First の考えにマッチします」（湯谷先生）

京都産業大学附属中学校では、ネイティブ教員がカリキュラム選定をして、レッスン後のワークシートを添削しており、彼らの授業とも連携している。

## 英語の授業を通じて生徒と 周りの世界をつなぐ

英語の授業を通じて生徒同士の人間関係が深まり、その結果クラスにエネルギーがあふれるという副次的な成果も現れているという。

「講義一辺倒の授業ばかりでは、生徒同士も隣の生徒とさえまったく会話がないこともあり。しかし、英語でコミュニケーションする機会を設けたことで、級友たちの今まで知らなかった一面に出会い、それによって人間関係が豊かになる生徒が増え、教室が明るくなりました。大変うれいす」（湯谷先生）



生徒が主役となり、教科書の内容を英語で発表し合う。